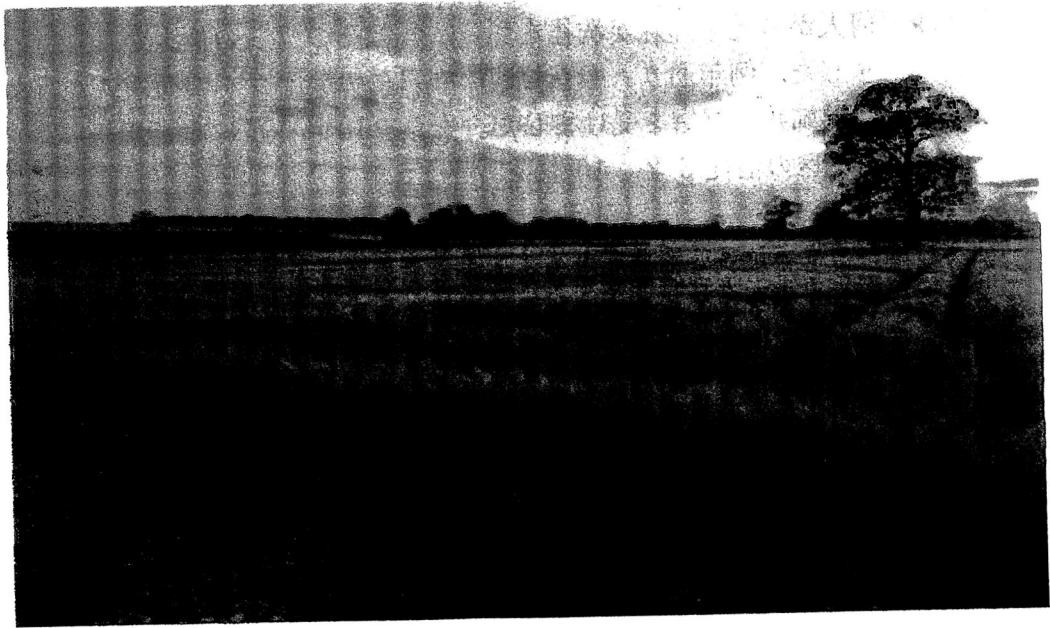


2024 年

年頭書簡

仙台教区という畑で神の協力者として



カトリック仙台教区 教区長
司教 ガクタン エドガル

親愛なる兄弟姉妹の皆様

新年のご挨拶を申し上げます

神が、皆さんの日々を平和のうちに保ち、皆さんの祈りを聞き入れ、永遠の命に導いてくださいますように。

1月1日は、「世界平和の日」でもあります。世界平和を希望する心を持ちながら、2023年を振り返り、いただいた恵みと今後の課題をお話したいと思います。

新年を迎えるにあたり、教区民として、私たちが昨年、一年間に受けた祝福のいくつかを数えてみましょう。

- 4月29日、17年ぶりに教区に新司祭が誕生しました。高木健太郎神父です。今フィリピンで英語を勉強中で、今年の夏帰国する予定です。
- 何人かの兄弟姉妹が洗礼を受け、私はそのうちの何人かに堅信の秘跡を授けました。例年通り、聖霊降臨の祝日にカテドラルで堅信式が行われ、5人の兄弟姉妹が堅信を受けました。また、10月8日に5年ぶりに四ツ家教会で第2地区の信徒5名、10月22日に6年ぶりに八戸塩町教会で三八ブロックの信徒21名が堅信を受けました。
- ベツレヘム外国宣教会によって創立された久慈教会は、11月18日に創立70周年を記念しました。久慈教会は、教区内の34の小教区と同様に、司祭が常駐していない教会です。また、教区内のほとんどの小教区と同様に、地域の多様な産業で技能研修生として働く多くの兄弟姉妹の心の拠り所となっています。
- 聖母被昇天修道会によって創立された青森明の星短期大学は、11月1日に創立60周年を記念しました。また、キリスト教学校修士会の兄弟たちによって設立されたラ・サール・ホームは、11月11日に創立75周年を記念しました。さらに、無原罪聖母宣教女会によって創立された郡山ザベリオ学園は、12月1日に創立90周年を記念しました。

私は各創立記念式典に出席し、創立に関わった修道会会員、信徒、教職員、生徒、保護者と共に、創立から現在に至るまで、恵みを注ぎ導かれた神に感謝を捧げました。

これらの創立記念式典に出席しながら、私は使徒パウロがコリントの信徒への第一の手紙3章に記した次の言葉を思い浮かべました。

⁵アポロとは何者か。また、パウロとは何者か。この二人は、あなたがたを信仰に導くために、それぞれ主がお与えになった分に応じて仕えた者です。
⁶わたしは植え、アポロは水を注いだ。しかし、成長させてくださったのは神です。⁷ですから、大切なのは、植える者でも水を注ぐ者でもなく、成長させてくださる神です。⁸植える者と水を注ぐ者とは一つですが、それぞれが働きに応じて自分の報酬を受け取ることになります。⁹わたしたちは神のために力を合わせて働く者であり、あなたがたは神の畑、神の建物なのです。

(日本聖書協会 新共同訳)

使徒パウロが例えたように、ミッションスクールや福祉施設、小教区などは植物のようなものです。これらの植物が植えられた土壌は、創設者たちによって耕され、歴代の後継者の人々の手によって手入れされてきました。これらの植物を成長させてくださった神に賛美を捧げると同時に、植えたり、水をやったり、手入れをしてくださった人々にも感謝します。これらの植物の果実は、兄弟姉妹の皆さん、そして社会や教会に教師、産業界や政治のリーダー、音楽家、芸術家、外交官、作家、主婦、ソーシャルワーカーなどとして貢献している卒業生たちです。

学校や社会福祉施設は、社会の最前線でイエス・キリストを紹介するのです。そこで働く人々の多くはカトリック信者ではありません。彼らは職場で初めてカトリック教会とその使命を知ります。かつて、司祭や修道者はこれらの事業の運営に直接携わり、教員や職員、学生、社会福祉施設の利用者と日常的に接していました。現在、司祭や修道者の高齢化に伴い、その運営は信徒やカトリック信者でない方々に委ねられるようになりました。

仙台北教区は神の畑です。畑の豊かな実りに感謝すると同時に、私たちの畑が徐々に縮小や転換していることも認める必要があります。農業と同じように、教会の維持が困難な中、後継者不足、高齢化、人口流出などにより、労働力不足をすぐに補うことができず、小教区が巡回教会に変更されたり、小教区が廃止されたり、教会建物が取り壊されたりするなど、仙台北の畑は小さくなりつつあります。

今年 2024 年の間、私たちは仙台北にある神の畑について語り、どのように手入れをし、世話をしていくべきなのか。耕す人、植える人、水をやる人は誰なのか、50 年前ほど働き手がいらない今、私たちはどのように協力し合うべきなのか。そういった課題を教区として話し合ってまいりましょう。

去年、仙台教区の小教区や巡回教会を現在の地区やブロックに再編成する際に、私はローマ教皇庁の聖職者省が 2020 年に出した「指針」を参考にいたしました。「教会の福音宣教に奉仕する小教区共同体の司牧的転換」と題する指針は、私たちに思い起こさせてくれることがいくつかあります。例えば、使徒パウロがその手紙の中で何度も「家に集まる教会」という表現を使っていること（ローマ 16:3-5、1 コリント 16:19、コロサイ 4:15 参照）。それらの「家にある教会」が最初の「小教区」の誕生の芽生えです。さらに、この指針は、「小教区は家々の中の家であり、礼拝の場であり、復活の主がその民のただ中に永続的におられることのしるしである」と述べています。

久慈小教区創立 70 周年記念式典で挨拶をした 1 人は、「教会は灯台のようなもので、人々への道しるべです」と言いました。この例えは上記、引用した小教区の性格に合っています。小教区は、復活したキリストの存在のしるしであり、その現存を感じに来てほしいと人々に呼びかける光なのです。

2 年間の準備期間を経て、世界代表司教会議（シノドス）・第 16 回通常総会の第一会期が、昨年 10 月 4 日から 25 日までローマで開催されました。私たちも教区民としてこのシノドスの準備に参加することになっていましたが、コロナ禍のため教区での意見聴取に応えることができたのは、ほんの少数の人でした。総会には、日本から 3 人が参加しました。その 1 人、西村桃子さんが仙台教区司祭の集いで、参加者としての経験を話し、特にシノドスで用いられた「聖霊における会話の方法」

を紹介してくれました。この方法は、すでにシノドスの「討議要綱」に公表されており、カトリック中央協議会のホームページから見るができます。わたしたちもシノドスの歩みに沿って、この方法を学びながら、これからの小教区、そして、教会について話し合ってまいりましょう。

主イエス・キリストのうちに。



仙台教区 教区長
司教 ガクタン エドガル

仙台市にて、2024 年 1 月 1 日、神の母聖マリアの祭日

